

## 「日本の原発事故から9年後の福島で生きる母親と乳児たちの様子」

～被曝した被災地の生活に不安を感じ続ける母親と乳児や放射能の測定を行うことにより自分の物語を語るできるようになった母親たち～

### 福島原発事故災害

2011年3月11日に日本で起きた戦後最大の災害である東日本大震災は、同時に福島原発事故も誘発しました。

原子炉の1号機、2号機、3号機がメルトダウンし、1号機と3号機は爆発しました。それは、国際原子力事象評価尺度レベル7の史上最悪の事故となりました。原発立地県である福島県の人々は、その日から原発事故災害の被災者となりました。

人々は、放射能という見えない恐ろしい存在に怯え、逃げ惑い、空気は放射能にまみれ、息を吸うことすらためらう状態でした。その中には、子どもも母親も女性も妊婦も胎児もいました。

地震や津波なら襲ってくる様子が目で確認できますが、原発事故による放射能の被害は見ることも嗅ぐこともできません。

その存在を感じる人々の感性だけが被害を知るセンサーであり、その感性は人により違いがあるため、感覚の違いは人々の心を引き裂き、コミュニティの分断が起きました。放射能による被曝被害、そこから起きる家族や友人との分裂など、二重、三重の被害は人々を恐怖のどん底に突き落とし、突き破ることができない重狂しい空気と閉塞感をもたらしました。その中で、特に苦しい立場にあったのは母親とその子どもでした。

### 子どもと母親の様子

明治維新以来、経済の発展が豊かさの象徴として崇められ突き進んできた日本の社会では、女性は常に社会の陰に立たされ、弱者であり、自分の意見を発信することや、自主的な考えを持つことは糾弾される傾向にありました。それは2011年も同様でした。

古代日本に息づいていた原始以来の産み育てる大らかな思想よりも、経済の発展と支配的な考えが優先される近代の「男社会」の中で、女性や母親たちが毅然とした声を上げることは、ほとんどできませんでした。

福島原発事故が起きた時、母親たちは子どもを抱きしめ、恐怖に震えながら見えない放射能に怯えていました。

それは本能的な怯えであり、「理由はわからないけれども危険だと思っている。子どもに危機が迫っている。」という感覚的なものでした。

感覚からの怯えや言葉は、理論的で科学的な考えとは評価されず、震災の打撃から経済的に復興しようとする社会の動きの中で、もみ消され無視されていきました。東日本大震災・福島原発事故災害から9年、社会的弱者である母親や女性、そして私たち自身が、声を上げること、息をすることもできなかった中で何を感じ、どう動き、自分の言葉を取り戻し、語り、物語を紡ぐに至ったのか、そのために科学はどう役だったのかを、お伝えいたします。

\* 福島第一原発3号機（爆発後）



Photo:Shun Kirishima

## 母親たちの取り組みと市民科学

2011年5月、私たちは放射能から身を守るために市民による放射能測定室を立ち上げる準備を始めました。それは子どもや家族の命を自分たちの手で守りたいと思ったからです。

原発事故以来、私たちの生活を被曝から守るための国の積極的な支援はありませんでした。

行政は、自国で起きた未曾有の災害に戸惑い、人々を守る術を持ちませんでした。

2011年11月13日、私たちは「いわき放射能市民測定室たらちね」を設立しました。

愛称の「たらちね」は、日本の古い言葉で、家族を守り育てる責任感のある厳しく強い母親の意味です。

市民が放射能を測定することは、特別な機関や階級の人々だけが知りうる情報を開示することにつながります。

それは、国や行政という権威への反逆という見方もされ、とても厳しい環境の中で開所しました。

「強い母権を持って運営しなければ、続けることはできない」という覚悟から愛称を「たらちね」としました。

最初の活動は、食品や水、母乳などの放射能測定でした。測定核種はセシウムです。

家庭菜園の野菜を孫に食べさせたい祖母と、放射能汚染が疑われる危険を感じて食べさせたくない母親の対立もありましたが、測定することで汚染が可視化され、問題は解決しました。測定し、汚染を知ることで食べるか食べないかの判断は簡単にでき、感情的にならずに問題は解決します。

また、ホールボディカウンター放射能測定器による人体内測定も行いました。

測定により、同じ地域の多くの人々が被曝していることがわかりました。また、遠方の親戚から「放射能で被曝し汚染されているのではないか？」という差別を受けた人が「自分は本当に放射能で汚染されているのか？」を確かめに來ることもありました。「被曝した」という恐怖と怒りを抱いた人々で、たらちねは連日、大混雑しました。その中で、私たちは、公正で正しい測定値を求め、人々に伝えるために日々、努力を続けました。

2012年7月、子どもたちの健康の回復と自然体験の実施のための「保養プロジェクト」を開始しました。認定NPO法人沖縄・球美の里と連携し、沖縄県久米島の大自然の中で、子どもたちが遊び、食べ、眠り、声を出して笑う、癒しと生命の活性化のための活動です。

福島では、自然環境が放射能で汚染されてしまい、子どもたちは草花や虫に触れることも、裸足で砂浜を歩くこともできなくなりました。安心できる自然の中で、自由に触れ合い感じる事が、子どもたちの心身には必要でした。



\*測定検体のお預かり



\*ガンマ線 食材の放射能測定



\*浜辺でのつなひきの様子



\*海あそび

2013年3月、子どもたちの甲状腺癌の多発が心配される時期になりました。

国は、一斉に福島県内の子どもたちの検診を実施しましたが、その結果が母親たちに知らされるのは検診の2ヶ月後でした。

そして、報告書の内容は簡単な分類のみでした。分類はA1、A2、B、Cの4種類です。

たらちねでは、保護者が同席する中で検診を実施し、医師が直接、丁寧に説明する検診を実施しました。

子どもはとても敏感で、検診者が言葉を発せずとも、エコー画像の中にのう胞や結節が映し出されると「自分は死ぬかもしれない」と、

直接、死と結びつける感覚を持ってしまいます。そのために保護者が同伴し、正確な説明を受けることはとても大事なことです。

甲状腺の検診事業は、たらちねがある福島県のいわき市に止まらず、福島県全域と福島県に隣接する地域にも出向いて実施しました。

現在も継続しています。

2014年10月、たらちねの放射能測定ラボは、分析の難しいベータ線核種の測定に着手しました。測定核種はストロンチウム90とトリチウムです。

2011年の原発事故で拡散した危険な核種ですが、測定法が難しいために、人々がその値を知る機会がありませんでした。特にストロンチウム90は土壌中にも存在します。学校の校庭や公園など子どもたちが活動する場所に潜んでおり、吸引から体内に取り込まれ、内部被曝に及ぶ危険があります。

子どもたちの体の中で、骨に蓄積し、そこから強いベータ線を発し続けます。

トリチウムは生物の組織と結合し、人体内に取り込まれるとDNAの中核に入り込み、遺伝子を傷つけます。

測定し、その所在を確かめ、そこには近づかないようにすることで子どもたちの健康を守ることができます。

私たちは、2011年の大混乱から私たち自身と大切な子どもたち、家族の心身を守るために、科学と向き合い検証し、発信してきました。

日々の歩みは小さくても、積み重ねた力は大きく、いつしか被曝被害を科学的に見つめることができるようになっていました。私たちの語る言葉を「根拠のないもの」としていた人々も、子どもを守るための大事なものとして耳を傾けるようになりました。

私たちが失っていた言葉を取り戻し、語りを始めることに日々の手仕事である「科学」は必要なものでした。



\* ベータ線 液体シンチレーションによる測定



\* ラボの様子



\* 測定結果について 話し合い

2016年1月、クリニックを開院する準備に着手しました。2012年から行っている「保養プロジェクト」には年を重ねるごとに、2011年前後に産まれた子どもたち、2011年に乳児期・幼児期を過ごした子どもたちの申し込みが増え、子どもたちの心身に変化を感じたのもこのころです。

精神的な薬や胃腸に関する薬を恒常的に服用している、落ち着きがない、さらには発達障害の診断名があるなどの子どもたちが多くなってきました。

また、放射能の測定や保養プロジェクトを利用している母親たちからは、抱えているたくさんの不安をどこにぶつけていいのか、どこに聞いたらいいのかかわからないという話を多く聞くようになりました。復興に向け、国や県が原発事故の被害は収束した、アンダーコントロールは成されている、という安全・安心を毎日のように発信する中で、社会的弱者である母親たちは口をつぐみ孤独にならざるをえませんでした。私たちは被災者であるにもかかわらず、放射能という言葉すら言いにくい、被曝に対する不安を口に出せない雰囲気になっていました。

母親たちの孤独と苦しみの声を受け、気持ちの中にある不安を自由に語るができる医療機関が必要だと気づきました。

2017年6月、クリニックを開院しました。ここではタブーとされてきた「放射能」という言葉を口に出しても良い環境を作りました。医師を始め看護師やスタッフ、誰にでも不安を相談できるクリニックを目指しました。

開院後、患者さんからは自家菜園で作った作物を子どもに食べさせてもいいのか、子どもは海に入りたいと言っているが親としては不安があるなど等、体調不良で来院したけれども、医師への相談は「放射能」を心配する内容も多くありました。

1つ1つ丁寧にこたえと「ここへきて良かった。」「不安に思う気持ちはあって当然だったのか。」と安心し、張り詰めていた緊張を和らげて帰る人も日々増えていきました。また、夜眠れない、食欲がない、学校から落ち着きがないと言われているなど等の相談も増えてきました。

日々の診療の限られた時間の中では、ゆっくり丁寧に向き合っていくことが難しい深刻な相談もありました。



\*クリニック 診察の様子

## 原発事故災害からみえてきた子どものこころのケア

2018年、このころになると、世の中では子どもに関する専門家の勉強会も多く開かれるようになりました。2011年前後に産まれた子どもたちの学校での離席率の高さや落ち着きがない子の多さ、睡眠障害、発達障害、診断名はないものの似通った行動が多く目立つなどが顕著になり、児童精神の専門家が教育の現場に対して講演や講習会を実施する必要性が出てきたからです。これはクリニックを開院し、母親たちの声からみえてきた様々な相談や悩みと同じ内容でした。

なぜいま、子どもたちに不調がでてきているのか。

母親たちは生活をしていく中で、今なお被曝の不安を抱え子どもたちの様子や変化にどう接したらいいのかわからない、と言います。

私たちは、自分たちに何ができるのか、を協力してくれる専門家も交えて何度も話し合いを重ねました。

そして、「母親と子どもに寄り添い、ともに歩むことが大切ではないか」という方向が見えてきました。

私たちにできることは、地域の子どもの健康と未来を支えるために、同じ場所で被災した大人の責任として、この問題に向き合っていくということです。

私たちと地域の母親は、被曝という恐怖の体験から恐れを感じ、こころが揺らぎ、不安を抱え、しかし、それを語るができなかったという屈辱的な同じ体験をしています。

その根本的な情けない気持ちや辛い気持ちを同じように感じることができる私たちだからこそ、母親たちと力を合わせるができると思いました。その思いから、母と子のこころのケアを事業化するために準備を始めました。

2019年1月、こころのケア事業「あとリエ たらちね」を開設しました。「ワルンペ」と「シッピーリカ」の2つの空間を子どもたちのために準備しました。「ワルンペ」は古代の言葉で「童」とか「子ども」などの意味を持ちます。ここは、箱庭あそびやお絵描きなど行い、子どもが自由に自分の感性を解放し、誰の邪魔も受けずに安心して遊びの世界に入りこむ、守られた空間です。

「シッピーリカ」とは「光り輝くところ、特別に良い場所」などの意味を持ちます。ここではボディワークを受けることができます。

ボディワークとは、皮膚や筋膜の解放を通じて、精神的に安心や安定を感じる施術です。

ボディワークは非言語のアプローチであり、言葉を語らずとも安らぎを感じるができるものです。



\*箱庭あそびの様子



\*ままごとあそび



\*あとリエ たらちね施設

ある母親と話をしている時です。震災当時、子どもは3歳だったが、その時の子どもの様子が全然思い出せないと言うのです。どう遊び、何を食べ、どう過ごしていたかわからないというのです。また、別の母親は話ながら涙を流し、当時の気持ちを話してくれました。避難をするかしないのか、その選択にも大きな葛藤があったこと。避難を選択しても、避難先での気遣いと不便さに戸惑いもありました。

避難しない選択の中では、常に被曝の不安がつきまとうことなど、子どもを育てる一番大切な時期に、母親自身のところが大きく揺れて不安定であることがわかりました。そして、その不安や恐怖は現在も続いていることに改めて気づき、その母親をじっと見つめる子どもに、その不安が伝染していく様子のはっきりと見えてきました。

子どもは不安がる母親に甘えられない、わがままを言えない、そんな環境の中で我慢強く生きてきました。

当時は胎児・乳児・幼児だった子どもが、8年経った今、これまで封じ込めてきた自分の思いをやっと言葉にし態度に出せるようになってきました。

それは親への反抗的な言葉であり、乱暴な態度であり、登校拒否であり、様々です。

中には、死にたい、死ぬしかない、という言葉を親に投げる子どももいます。

8年経った今、子どもたちの成長と変化から、あの時失ってしまった大切なことの大きさに、私たち自身が気づき始めました。

継続している「保養プロジェクト」は、「心身の解放」にとっても役立っています。保養所のある久米島は、自然が豊かで、島全体が癒しの場でありセラピー効果のある場所です。しかし、期間が限定されているプログラムのため、永遠にそこで暮らすことはできません。

子どもたちにとっては夢のような非日常の期間です。

人々にとって、日々の暮らしのありようが日常であり、その中で問題をどう見つめていくのかは、とても重要です。「あと見えたらちね」は日常の癒しの場所になり、母と子のところに寄り添う場所なのです。



\*黒板あそび

子どもたちが育ってきた環境は、被曝被害の実相とともにあります。「見えない被害は、なかったことにしてもいい」という大人の歪んだ考えの中で、教育を受け心身を育む子どもたち。今もなお続く、これらの被災地特有の問題を抱えながら私たちは、この事業を通じて、子どもたちと関わりを続けています。

震災当時は乳児・幼児だった子どもたちは小学生・中学生になっており、ギャング世代・思春期を迎えています。この世代の特性も踏まえ、日常生活の中で常に見えない・におわない・感じない放射能汚染を気にし、予防原則に基づいた被曝防護を行い、子育てをする母の負担はとて大きなものです。そんな今日、定期的に通っているお子さんからは「ここに来るようになって、自分の気持ちを上手に話せるようになったよ。」「たらちねがあるから僕は大丈夫だよ」という言葉もいただきました。母親からは「子どもが楽しみにしている姿に、私も嬉しい気持ちでいっぱいです。」「子どもとじっくり向き合う時間を大切にしたいと、改めて思うようになりました。」という声があります。

私たちにできることは母と子の話を聞き、寄り添う子ことです。日々の活動は、目に見えて成果があるものではありません。しかし、時間をかけ積み重ねることによって見えてくるがたくさんあります。

原発事故から10年目、これから先を、私たち自身がどう生きるのか。地域の母親たちとともに、子どもの成長を見つめ、守り支える活動を続ける中で、私たち自身のこころも支えられることと思います。

子どもたちを守り支え育てることは、私たち自身が生きていける支えでもあります。



\*母子の触れあい

